

## 【様式2】

## 教育プログラム・コースの概要

大学名等	大阪大学大学院医学系研究科														
教育プログラム・コース名	保健学専攻（博士前期課程）・がん予防医学コース（正規課程）														
対象職種・分野	診療放射線技師、臨床検査技師														
修業年限（期間）	2年														
養成すべき人材像	医療統計学と分子生物学の実験を用いた「がん予防医学のための研究」を行い、新しいがん予防医学体系を実践するための医療人を育成する。具体的には疫学ビッグデータを用いた医療統計解析と動物モデル・細胞を用いたウェットの実験を行い、がん予防に繋がる高危険群の絞り込み方法を開発する。本研究を通じてがん発症高リスク群の対象者を絞り込み、がん発症を予防するための適切な指導能力を身につけ、がん予防指導のできる医療専門家を養成する。														
修了要件・履修方法	必修科目26単位（高度国際性涵養教育科目2単位を含む）、高度教養教育科目として選択必修科目Aから1単位以上、合計30単位以上を修得しなければならない。かつ、がん予防疫学に関する研究を行い、論文指導を受けた上で、本大学院が行う修士論文の審査および最終試験に合格すること。														
履修科目等	（必修科目）がん予防診断学I・II（各4単位）、がん予防診断学実習I・II（各4単位）、医療技術科学ゼミナールI・II（各4単位）、がんの病態生理学各論（2単位） （選択必修科目A）ゲノム医薬品学特論（1単位）、医療協働術（サイコオンコロジーと健康心理学）（2単位）、先進がん薬物療法副作用学特論（1単位）、先進緩和医療薬物学特論（1単位） （選択必修科目B）肝疾患代謝学（2単位）、がんの病態生理学（2単位）、臨床腫瘍学総論I・II（2単位）														
がんに関する専門資格との連携	がん予防エキスパート制度（がん予防学会）の認定資格取得について現在申請中														
教育内容の特色等（新規性・独創性等）	がん発症高リスク対象者を絞り込み、適切な指導を行うことでがん罹患者数を減らすことは各個人のQOL上昇のみならず医療経済的にも重要な課題である。都道府県がん診療連携拠点病院である大阪国際がんセンターがん対策センターより提供される疫学ビッグデータから得られた統計学的解析結果を基礎研究で検証し、新たにがん予防医学体系を構築し、この分野の発展に寄与する人材の育成に取り組む。														
指導体制	教授1名（鎌田佳宏）、特任准教授1名（藤井 誠）が主に講義・実習を担当する。他学部への講義の参加や大学院での臨床教育は隨時行う。大阪国際がんセンターがん対策センター所長 宮代 熟 大阪大学招聘教授には疫学ビッグデータの提供についてご協力いただく。医学統計の若手エキスパートとして大阪大学医学研究科 藤井誠特任准教授が担当する。														
修了者の進路・キャリアパス	がん予防医学の研究者として大学、研究センター、企業の研究所などで研究を行っていく。また健診施設において受診者に適切な指導を行うことができる人材としての活躍が期待できる。														
受入開始時期	令和6年4月														
受入目標人数 <small>※当該年度に「新たに」入学する人数を記載。 ※新規に設置したコースに限る。</small>	<table border="1"> <thead> <tr> <th>R5年度</th><th>R6年度</th><th>R7年度</th><th>R8年度</th><th>R9年度</th><th>R10年度</th><th>計</th></tr> </thead> <tbody> <tr> <td>0</td><td>1</td><td>1</td><td>1</td><td>1</td><td>1</td><td>5</td></tr> </tbody> </table>	R5年度	R6年度	R7年度	R8年度	R9年度	R10年度	計	0	1	1	1	1	1	5
R5年度	R6年度	R7年度	R8年度	R9年度	R10年度	計									
0	1	1	1	1	1	5									
受入目標人数設定の考え方・根拠	過去の大学院前期課程志願者数及び入学ニーズ調査から毎年度3人の志願者が見込まれるため、がんに対応できる人材として受け入れ目標人数をそのうち1人と設定。														

【様式 2】

大学名等	大阪大学大学院医学系研究科
教育プログラム・コース名	医学専攻・乳癌研究コース（正規課程）
対象職種・分野	医師
修業年限（期間）	4年
養成すべき人材像	生検や手術サンプル、血液サンプルなどの生体資料によって得られた分子情報と治療効果、予後などの臨床情報との関連を調べる。また腫瘍微小環境における免疫系の役割解明なども含めて臨床サンプルを生かした独自の研究を展開することで、乳癌の外科治療・内科治療に関する先端的な基礎的・臨床的研究を推進する人材を養成する。同時に患者の痛みや乳癌サバイバーの悩みを理解できる思いやりのある医師を養成する。
修了要件・履修方法	必修科目24単位、選択科目6単位以上で合計30単位を修得し、研究指導を受けた上で、博士論文の審査および最終試験に合格すること。臨床(補助)の経験を通じて乳腺外科専門医の取得も目指す。
履修科目等	<必修科目> <u>実験実習I, II (各4単位)</u> 、 <u>グループセミナーI, II (各4単位)</u> 、 <u>乳癌セミナーI, II (各4単位)</u> <選択科目> <u>論文精読セミナーI, II (各2単位)</u> 、 <u>病院実習I, II (各1単位)</u> がんの病態生理学総論（2単位：春夏学期）、がんの病態生理学各論（2単位：秋冬学期）、今、がんは（2単位：秋冬学期）、特別セミナー（4年間で10単位、研究発表会、研究セミナーの他に横断的腫瘍フォーラム、キャンサーサポート、がんプロ主催の患者交流会、合同研修会、市民公開講座、各種セミナーを含む）
がんに関する専門資格との連携	外科専門医、乳腺外科専門医（日本専門医機構）の研修施設として認定。
教育内容の特色等（新規性・独創性等）	先制医療として遺伝性乳癌卵巣癌症候群の乳癌患者の予防的乳房切除についても習得する。当院は日本遺伝性腫瘍学会 遺伝性腫瘍研修施設であり、専門医の指導のもと、遺伝性乳癌卵巣癌症候群で適用しうる先制医療としての予防的措置について学ぶことができる。充実した選択科目によって他分野の知識を幅広く身につけさせる。チーム医療実践のために多職種が参加する講義やキャンサーサポートに出席し、他の医療職との連携を修得させる。
指導体制	大阪大学医学部附属病院による数多くの乳癌診療、高いレベルの手術・薬物療法、臨床研究などを学習するとともに、乳癌を中心としたレベルの高い基礎研究を行うよう指導体制が整っている。 島津研三 大阪大学大学院乳腺・内分泌外科教授 下田雅史 大阪大学大学院乳腺・内分泌外科准教授 多根井智紀 大阪大学大学院乳腺・内分泌外科講師 三宅智博 大阪大学大学院乳腺・内分泌外科助教 草田義昭 大阪大学大学院乳腺・内分泌外科助教 塚部昌美 大阪大学大学院乳腺・内分泌外科助教 増永奈苗 大阪大学大学院乳腺・内分泌外科助教 阿部かおり 大阪大学大学院乳腺・内分泌外科特任助教 吉波哲大 大阪大学大学院乳腺・内分泌外科特任助教
修了者の進路・キャリアパス	研究コースの目標として医学博士を取得する。がんの外科に関する各種専門医資格（外科専門医、乳腺外科専門医など）を取得する。がん診療拠点病院などでリサーチマインドをもって未解決の臨床的課題に取り組み、高度な医療を安全に提供できる乳腺外科医となるよう教育する。
受入開始時期	令和5年7月
受入目標人数 ※当該年度に「新たに」入学する人数を記載。 ※新規に設置したコースに限る。	R5年度 R6年度 R7年度 R8年度 R9年度 R10年度 計 1 1 1 1 1 1 6
受入目標人数設定の考え方・根拠	大阪府内の66のがん拠点病院（国および府指定、小児を除く）に乳腺外科専門医を最低3人ずつ配置することを目標にすると、大阪府内の乳腺専門医数が194人のため今後5年間で5人養成する。また、過去の大学院志願者数及び入学ニーズ調査から毎年度1人の志願者が見込まれるため、受入れ目標人数を1人と設定する。

【様式 2】

大学名等	大阪大学大学院医学系研究科
教育プログラム・コース名	医学専攻・婦人科腫瘍先端研究コース（正規課程）
対象職種・分野	医師
修業年限（期間）	4年
養成すべき人材像	婦人科がん腫瘍サンプルや治療前後の血液サンプルなどの生体資料によって得られた分子情報と予後などの臨床情報との関連を調べる。具体的には卵巣がんや子宮体がん、子宮頸がんであれば、腹膜播種形成やリンパ節転移におけるがんと腹膜中皮細胞やリンパ管内皮細胞との細胞間連絡機構の解明、腫瘍微小環境におけるウイルスゲノムや免疫系の役割解明、化学療法や放射線の効果・耐性的分子機構の解明、なども含めて臨床サンプルを生かした産婦人科独自の研究を展開することで、がんの外科治療に関する先端的な基礎的・臨床的研究を推進する人材を養成する。また研究と並行して、BRCA関連がんである卵巣がん、腹膜がん、リンチ症候群に関する遺伝カウンシリング、予防的卵巣卵管切除術を行える人材を養成する。同時に患者の痛みや妊娠性を含むがんサバイバーの悩みを理解できる思いやりのある医師を養成する。
修了要件・履修方法	必修科目24単位、選択科目6単位以上で合計30単位を修得し、研究指導を受けた上で、博士論文の審査および最終試験に合格すること。臨床(補助)の経験を通じて婦人科腫瘍専門医・がん治療専門医の取得を目指す。
履修科目等	<必修科目> 実験実習I, II (各4単位)、グループセミナーI, II (各4単位)、がん横断セミナーI, II (各4単位) <選択科目> 論文精読セミナーI, II (各2単位)、病院実習I, II (各1単位) がんの病態生理学総論（2単位:春夏学期）、がんの病態生理学各論（2単位:秋冬学期）、今、がんは（2単位:秋冬学期）、特別セミナー（4年間で10単位、研究発表会、研究セミナーの他に横断的腫瘍フォーラム、キャンサーサポート、がんプロ主催の患者交流会、合同研修会、市民公開講座、各種セミナーを含む）
がんに関する専門資格との連携	婦人科腫瘍専門医（日本産婦人科学会）・がん治療専門医（日本癌治療学会）の研修施設として認定。
教育内容の特色等（新規性・独創性等）	大阪大学関連病院による数多くの臨床研究、高いレベルの手術、ロボット手術をはじめとした高難度新規医療技術の導入など学習するとともに、婦人科がんに焦点を当てたレベルの高い基礎研究を行う。また、チーム医療実践のために多職種が参加する講義やキャンサーサポートに出席し、他の医療職との連携を修得させる。特に遺伝診療部のカンファレンスに参加し、臨床遺伝のカウンセリングができる知識を身に着ける。充実した選択科目によって他分野の知識を幅広く身につけさせる。産科学ではがんサバイバーの妊娠性の問題や、婦人科では先制医療などの新しい医療についての教育を普及させる。
指導体制	基礎研究の強みは勿論のこと、先制医療やがんサバイバーの妊娠性の問題にいち早く取り組み当該分野のリーダーとしての実績がある。
修了者の進路・キャリアパス	研究コースの目標として医学博士を取得する。婦人科がん手術に関する各種専門医資格（産婦人科専門医、婦人科腫瘍専門医、内視鏡外科技術認定医、臨床遺伝専門医など）を取得する。がん診療拠点病院などでリサーチマインドをもって未解決の臨床的課題に取り組み、高度な医療を安全に提供できる産婦人科腫瘍専門医となるよう教育する。
受入開始時期	令和5年7月
受入目標人数 ※当該年度に「新たに」入学する人数を記載。 ※新規に設置したコースに限る。	R5年度 R6年度 R7年度 R8年度 R9年度 R10年度 計 1 1 1 1 1 1 6
受入目標人数設定の考え方・根拠	過去の大学院志願者数及び入学ニーズ調査から産科・婦人科として毎年度7-8人の志願者が入学する。婦人科を専攻する3名程度の中から、最新医療と基礎研究の両方に意欲的に取り組む学生を最低1人は養成するように設定した。

## 【様式2】

## 教育プログラム・コースの概要

大学名等	大阪大学大学院医学系研究科
教育プログラム・コース名	医学専攻・小児血液・腫瘍先端研究コース（正規課程）
対象職種・分野	医師
修業年限（期間）	4年
養成すべき人材像	小児血液がん検体など生検試料によって得られた分子情報と予後などの臨床情報との関連を調べる。また、小児血液・がんは、近年の集学的治療の進歩で治療成績の改善が得られているが、一方で、治療後の人生が長い小児において、小児がんサバイバー（CCS）に対する質の高いフォローアップ体制の確立は、近年ニーズが高い。これらの背景、原疾患の予後などを理解し、CCSに対する再発管理はもちろん、身体的、心理社会的問題に対処する体制構築などに貢献できる人材を育成する。同時に患者の痛みやがんサバイバーの悩みを理解できる思いやりのある医師を養成する。
修了要件・履修方法	必修科目14単位、選択科目4単位以上で合計18単位を修得し、研究指導を受けた上で、博士論文の審査および最終試験に合格すること。臨床(補助)の経験を通じて小児血液・がん専門医の取得も目指す。
履修科目等	<必修科目> <u>実験実習I, II (各4単位)</u> 、 <u>小児血液・がんグループ臨床カンファレンスI, II (各1単位)</u> 、 <u>小児血液・腫瘍セミナーI, II (各2単位)</u> <選択科目> <u>論文精読セミナーI, II (各2単位)</u> 、 <u>病院実習I, II (各1単位)</u> 。 <u>小児血液・がんの病態生理学総論</u> （2単位：春夏学期）、 <u>小児血液・がんの病態生理学各論</u> （2単位：秋冬学期）、 <u>今、がんは</u> （2単位：秋冬学期）、 <u>特別セミナー</u> （4年間で10単位、研究発表会、研究セミナーの他に横断的腫瘍フォーラム、キャンサーサポート、がんプロ主催の患者交流会、合同研修会、市民公開講座、各種セミナーを含む）
がんに関する専門資格との連携	小児科血液・腫瘍領域に関する各種専門医資格（小児科専門医、血液専門医、小児血液・がん専門医、造血細胞移植認定医）の研修施設として認定。
教育内容の特色等（新規性・独創性等）	大阪大学医学部附属病院における小児血液・がんに対する数多くの多施設共同臨床研究、同種もしくは自家造血細胞移植、免疫療法やCAR-T細胞療法導入など、高いレベルの臨床を学習するとともに、基礎研究に携わる。また、チーム医療実践のために多職種が参加する講義やキャンサーサポートに出席し、他の医療職との連携を修得させる。充実した選択科目によって他分野の知識を幅広く身につけさせる。
指導体制	上記の研究に関する教育のみならずがんサバイバーというテーマでは、成人のがんサバイバー以上に小児がんは長期のフォローアップが必要となる。外来で実際にがんサバイバーの再発管理の補助を行い、質の高いフォローアップについて学習できることが本コースの強みと言える。 指導体制 窪田拓生 大阪大学大学院医学系研究科小児科学 准教授 宮村能子 大阪大学大学院医学系研究科小児科学 講師 皆川 光 大阪大学大学院医学系研究科小児科学 特任助教 横井健人 大阪大学大学院医学系研究科小児科学 医員 桂 聰哉 大阪大学大学院医学系研究科小児科学 医員
修了者の進路・キャリアパス	研究コースの目標として医学博士を取得する。小児科血液・腫瘍領域に関する各種専門医資格（小児科専門医、血液専門医、小児血液・がん専門医、造血細胞移植認定医など）を取得する。がん診療拠点病院などでリサーチマインドをもって未解決の臨床的課題に取り組み、高度な医療を安全に提供できる小児血液・腫瘍医になるよう教育する。
受入開始時期	令和5年7月
受入目標人数 <small>※当該年度に「新たに」入学する人数を記載。 ※新規に設置したコースに限る。</small>	R5年度 R6年度 R7年度 R8年度 R9年度 R10年度 計 0 1 1 1 1 1 5
受入目標人数設定の考え方・根拠	これまで小児科には毎年度3-5人の入学者があり、そのうち血液がんのグループに配属される人数は0-1名程度であるので、受入れ目標人数を1人と設定した。

【様式 2】

大学名等	大阪大学大学院医学系研究科														
教育プログラム・コース名	多職種連携がん医療人養成コース（正規課程、インテンシブコース）														
対象職種・分野	医師、看護師、薬剤師、臨床検査技師、放射線技師、細胞検査士、臨床心理士、理学療法士、栄養管理士、医療ソーシャルワーカー、遺伝カウンセラー														
修業年限（期間）	1年（インテンシブコースの場合）、2年（博士前期課程）、4年（博士後期課程）														
養成すべき人材像	異なる医療職、診療分野の専門性を認識し、多職種による協同に基づく、各診療科の境界疾患や、複数の併存症を有するがん患者への診療科間の連携した診療、心理社会的な問題に配慮したがん診療への対応を可能とする医療人を育成する。														
修了要件・履修方法	正規コースの場合、ダブルウイングの主プログラムに加えて、多職種キャンサーボード実習を博士前期課程は2単位、選択科目13単位、博士後期課程は4単位、選択科目11単位を修得する。インテンシブコースの場合、1年で10回以上の実習に参加する（1単位）。														
履修科目等	<必修科目>キャンサーボード実習（1-4単位） <選択科目>現代がん特論（1単位）、最新がん治療特論（1単位）、がんの病態生理学総論（2単位：春夏学期）、がんの病態生理学各論（2単位：秋冬学期）、今、がんは（2単位：秋冬学期）、特別セミナー（研究発表会、研究セミナー、横断的腫瘍フォーラム、がんゲノムエキスパートパネル、がん相談支援センター患者交流会、がんプロ主催の患者交流会、合同研修会、市民公開講座、各種セミナーを含む）														
がんに関する専門資格との連携	各種がん専門職の研修施設として認定。														
教育内容の特色等（新規性・独創性等）	本プログラムは各専門間の境界領域となる原発不明がんの診療、複数の併存疾患を有するがん患者の診療や、irAEなどの複数の臓器病変にまたがる副作用管理など専門診療科間の協調的な診療体制の強化を進めるものである。また、各世代ごとに特徴的な、妊娠性、勉学や仕事との両立の課題や、病状の変化に伴う心理社会的な課題、終末期医療、がんサバイバーへの対応に関わる多職種の医療職の専門性を理解し、多職種が有機的に関わる体制を確立するものである。														
指導体制	水木満佐央（血液・腫瘍内科 准教授、病院教授）、各診療科責任医師、オンコロジーセンター医師、看護師、MSW、緩和医療センター医師、看護師、リハビリテーション医師、理学療法士、管理栄養士、認定臨床心理士、認定遺伝カウンセラー														
修了者の進路・キャリアパス	修了者は、がん診療の現場でそれぞれの専門職として活動するとともに、他の専門職と協同して、多面的ながん診療を推進する人材として活躍することが期待される。各がん診療拠点病院においてすでに開催されている、キャンサーボード等の多職種によるがん診療の検討の現場において、指導的立場として運営に関与する人材となることが期待される。														
受入開始時期	令和6年4月														
受入目標人数 ※当該年度に「新たに」入学する人数を記載。 ※新規に設置したコースに限る。	<table border="1"> <thead> <tr> <th>R5年度</th><th>R6年度</th><th>R7年度</th><th>R8年度</th><th>R9年度</th><th>R10年度</th><th>計</th></tr> </thead> <tbody> <tr> <td>0</td><td>3</td><td>3</td><td>3</td><td>3</td><td>3</td><td>15</td></tr> </tbody> </table>	R5年度	R6年度	R7年度	R8年度	R9年度	R10年度	計	0	3	3	3	3	3	15
R5年度	R6年度	R7年度	R8年度	R9年度	R10年度	計									
0	3	3	3	3	3	15									
受入目標人数設定の考え方・根拠	すでに各医療現場で勤務している医療者を対象としたプログラムであり、受講者の勤務負担に応じてプログラムを行うため、3名ずつの受け入れとする。														

## 【様式2】

## 教育プログラム・コースの概要

大学名等	大阪大学大学院医学系研究科
教育プログラム・コース名	医学専攻・肺がん研究コース（正規課程）
対象職種・分野	医師
修業年限（期間）	4年
養成すべき人材像	生検や手術サンプル、血液サンプルなどの生体資料によって得られた分子情報と治療効果、予後などの臨床情報との関連を調べる。また腫瘍微小環境における免疫系の役割解明なども含めて臨床サンプルを生かした独自の研究を展開することで、がんの内科治療に関する先端的な基礎的・臨床的研究を推進する人材を養成する。同時に患者の痛みやがんサバイバーの悩みを理解できる思いやりのある医師を養成する。
修了要件・履修方法	必修科目24単位、選択科目6単位以上で合計30単位を修得し、研究指導を受けた上で、博士論文の審査および最終試験に合格すること。臨床（補助）の経験を通じて呼吸器専門医の取得も目指す。
履修科目等	<必修科目> 実験実習I, II (各4単位)、呼吸器免疫学研究セミナーI, II (各4単位)、肺がん臨床セミナーI, II (各4単位) <選択科目> 論文精読セミナーI, II (各2単位)、病院実習I, II (各1単位)、 がんの病態生理学総論（2単位：春夏学期）、がんの病態生理学各論（2単位：秋冬学期）、今、がんは（2単位：秋冬学期）、特別セミナー（4年間で10単位、研究発表会、研究セミナーの他に横断的腫瘍フォーラム、キャンサーサポート、がんプロ主催の患者交流会、合同研修会、市民公開講座、各種セミナーを含む）
がんに関する専門資格との連携	呼吸器専門医（日本呼吸器学会）の研修施設として認定。
教育内容の特色等（新規性・独創性等）	大阪大学医学部附属病院における肺がん診療、臨床研究、他癌種症例の免疫チェックポイント阻害薬有害事象マネジメントなどを学習するとともに、肺がんの微小環境評価やゲノム解析などを中心としたレベルの高い基礎研究を行うコースとして新設する。チーム医療実践のために多職種が参加する講義やキャンサーサポートにも出席し、他の医療との連携を修得させる。充実した選択科目によって他分野の知識を幅広く身につけさせる。
指導体制	呼吸器免疫内科学教室は免疫学の世界的権威である熊ノ郷教授の指導のもと、世界最先端の免疫研究を行なっている強みがある。個別の指導に加え、臨床カンファレンス、基礎研究グループでのディスカッションを通じて、診療科や研究領域を超えて活躍できる人材を育てる。 熊ノ郷 淳 大阪大学大学院呼吸器免疫内科学 教授 武田 吉人 大阪大学大学院呼吸器免疫内科学 准教授 平田 陽彦 大阪大学大学院呼吸器免疫内科学 副科長 三宅 浩太郎 大阪大学大学院呼吸器免疫内科学 外来医長 白山 敬之 大阪大学大学院呼吸器免疫内科学 病棟医長 内藤 祐二朗 大阪大学大学院呼吸器免疫内科学 助教
修了者の進路・キャリアパス	研究コースの目標として医学博士を取得する。肺がん診療に関する各種専門医資格（呼吸器専門医、気管支鏡専門医、がん治療認定医、がん薬物療法専門医など）を取得する。がん診療拠点病院などでリサーチマインドをもって未解決の臨床的課題に取り組み、高度な医療を安全に提供できる腫瘍内科医となるよう教育する。
受入開始時期	令和5年7月
受入目標人数 <small>※当該年度に「新たに」入学する人数を記載。 ※新規に設置したコースに限る。</small>	R5年度 R6年度 R7年度 R8年度 R9年度 R10年度 計 1 1 1 1 1 1 6
受入目標人数設定の考え方・根拠	これまで呼吸器・免疫内科学教室には毎年度6-8人程度の入学者があり、そのうち呼吸器グループに配属され、がん研究を行う人数は1-2名程度であるので、受入れ目標人数を1人と設定した。

【様式 2】

大学名等	大阪大学大学院医学系研究科														
教育プログラム・コース名	医学専攻・血液・腫瘍内科先端研究コース（正規課程）														
対象職種・分野	医師														
修業年限（期間）	4年														
養成すべき人材像	血液がん検体などの生体試料によって得られた分子情報と予後などの臨床情報との関連を調べる。また造血幹細胞移植やCAR-T細胞療法など最新治療も含めて臨床サンプルを生かした血液・腫瘍内科独自の研究を展開することで、血液・腫瘍内科治療に関する先端的な基礎的・臨床的研究を推進する人材を養成する。同時に患者の痛みやがんサバイバーの悩みを理解できる思いやりのある医師を養成する。														
修了要件・履修方法	必修科目24単位、選択科目6単位以上で合計30単位を修得し、研究指導を受けた上で、博士論文の審査および最終試験に合格すること。臨床（補助）の経験を通じて血液専門医の取得も目指す。														
履修科目等	<必修科目>実験実習I, II (各4単位)、グループセミナーI, II (各4単位)、血液がん横断セミナーI, II (各4単位) <選択科目>論文精読セミナーI, II (各2単位)、病院実習I, II (各1単位)、血液がんの病理学総論（2単位：春夏学期）、血液がんの病理学各論（2単位：秋冬学期）、血液がんに対する最先端治療（2単位：秋冬学期）、特別セミナー（4年間で10単位、研究発表会、研究セミナーの他に横断的腫瘍フォーラム、キャンサーサポート、がんプロ主催の患者交流会、合同研修会、市民公開講座、各種セミナーを含む）														
がんに関する専門資格との連携	血液学専門医（日本血液学会）の研修施設として認定。														
教育内容の特色等（新規性・独創性等）	大阪大学関連病院による数多くの臨床研究、高いレベルの造血幹細胞移植、CAR-T細胞療法の導入など学習するとともに、血液がんを中心としたレベルの高い基礎研究を行う。また、チーム医療実践のために多職種が参加する講義やキャンサーサポートに出席し、他の医療職との連携を修得させる。充実した選択科目によって他分野の知識を幅広く身につけさせる。新しい遺伝子細胞治療であるCAR-T細胞療法の基礎と臨床の両方を教える。														
指導体制	当教室は腫瘍特異抗体を開発しCAR-T療法に応用する研究成果をNature medicine誌に発表するなど世界のがん免疫研究をリードする。以下のスタッフで基礎研究、臨床実習を指導する。 保仙 直毅 大阪大学大学院血液・腫瘍内科学講座教授 加藤 恒 大阪大学大学院血液・腫瘍内科学講座講師 福島 健太郎 大阪大学大学院消化器外科講座講師 藤田 二郎 大阪大学大学院消化器外科講座講師 植田 康敬 大阪大学大学院消化器外科講座助教 オンコロジーセンター 准教授 水木 満佐央（血液内科専門医）との密な連携を図る														
修了者の進路・キャリアパス	研究コースの目標として医学博士を取得する。血液・腫瘍内科に関する各種専門医資格（血液専門医、造血細胞移植認定医、がん薬物療法専門医など）を取得する。がん診療拠点病院などでリサーチマインドをもって未解決の臨床的課題に取り組み、高度な医療を安全に提供できる血液内科医となるよう教育する。														
受入開始時期	令和5年7月														
受入目標人数 <small>※当該年度に「新たに」入学する人数を記載。 ※新規に設置したコースに限る。</small>	<table border="1"> <thead> <tr> <th>R5年度</th> <th>R6年度</th> <th>R7年度</th> <th>R8年度</th> <th>R9年度</th> <th>R10年度</th> <th>計</th> </tr> </thead> <tbody> <tr> <td>2</td> <td>2</td> <td>2</td> <td>2</td> <td>2</td> <td>2</td> <td>12</td> </tr> </tbody> </table>	R5年度	R6年度	R7年度	R8年度	R9年度	R10年度	計	2	2	2	2	2	2	12
R5年度	R6年度	R7年度	R8年度	R9年度	R10年度	計									
2	2	2	2	2	2	12									
受入目標人数設定の考え方・根拠	過去の大学院志願者数及び入学ニーズ調査から毎年度2人の志願者が見込まれたため、受入れ目標人数を2人と設定。														

【様式2】  
教育プログラム・コースの概要

大学名等	大阪大学大学院医学系研究科					
教育プログラム・コース名	医学専攻・外科先端研究コース（正規課程）					
対象職種・分野	医師					
修業年限（期間）	4年					
養成すべき人材像	外科切除サンプルや血液サンプルなどの生体資料によって得られた分子情報と予後などの臨床情報との関連を調べる。また腫瘍微小環境における免疫系の役割解明なども含めて臨床サンプルを生かした外科独自の研究を開拓することで、がんの外科治療に関する先端的な基礎的・臨床的研究を推進する人材を養成する。同時に患者の痛みやがんサバイバーの悩みを理解できる思いやりのある医師を養成する。					
修了要件・履修方法	必修科目24単位、選択科目6単位以上で合計30単位を修得し、研究指導を受けた上で、博士論文の審査および最終試験に合格すること。臨床(補助)の経験を通じて外科・消化器外科専門医の取得を目指す。					
履修科目等	<p>&lt;必修科目&gt; 実験実習I, II (各4単位)、グループセミナーI, II (各4単位)、消化器がん横断セミナーI, II (各4単位)</p> <p>&lt;選択科目&gt; 論文精読セミナーI, II (各2単位)、病院実習I, II (各1単位)、</p> <p>がんの病態生理学総論（2単位:春夏学期）、がんの病態生理学各論（2単位:秋冬学期）、今、がんは（2単位:秋冬学期）、特別セミナー（4年間で10単位、研究発表会、研究セミナーの他に横断的腫瘍フォーラム、キャンサーボード、がんプロ主催の患者交流会、合同研修会、市民公開講座、各種セミナーを含む）</p>					
がんに関する専門資格との連携	外科専門医（日本外科学会）、消化器外科専門医（日本消化器外科学会）の研修施設として認定。					
教育内容の特色等（新規性・独創性等）	大阪大学関連病院による数多くの臨床研究、高いレベルの手術、高難度新規医療技術の導入など学習とともに、消化器がんを中心としたレベルの高い基礎研究を行う。また、チーム医療実践のために多職種が参加する講義やキャンサーボードに出席し、他の医療職との連携を修得させる。充実した選択科目によって他分野の知識を幅広く身につけさせる。ゲノムパネル検査やctDNA検査といった最新の検査手法についても知識を得る。特にがん微小環境における免疫細胞の役割については細胞実験やマウスを用いた実験では解明できない点が多く、生体材料を用いた研究に利点がある。					
指導体制	<p>主として血液サンプルや胆汁などの体液、切除されたサンプルを利用しての研究を行い、メカニズムの解析に展開する。</p> <p>土岐祐一郎 大阪大学大学院消化器外科II講座教授      江口英利 大阪大学大学院消化器外科I講座教授      小林省吾 大阪大学大学院消化器外科講座准教授      黒川幸典 大阪大学大学院消化器外科講座准教授      植村 守 大阪大学大学院消化器外科講座講師</p>					
修了者の進路・キャリアパス	研究コースの目標として医学博士を取得する。がんの外科に関する各種専門医資格（外科専門医、消化器外科専門医、内視鏡外科技術認定医、食道外科専門など）を取得する。がん診療拠点病院などでリサーチマインドをもって未解決の臨床的課題に取り組み、高度な医療を安全に提供できる外科医となるよう教育する。					
受入開始時期	令和5年7月					
受入目標人数 <small>※当該年度に「新たに」入学する人数を記載。 ※新規に設置したコースに限る。</small>	R5年度	R6年度	R7年度	R8年度	R9年度	R10年度 計
	2	3	3	3	3	17
受入目標人数設定の考え方・根拠	過去の大学院志願者数及び入学ニーズ調査から、毎年度2-3人の本プログラムへの志願者が見込まれるため、受入れ目標人数を2-3人と設定。					

【様式 2】

大学名等	大阪大学大学院医学系研究科
教育プログラム・コース名	医学専攻・消化器内科コース（正規課程）
対象職種・分野	医師
修業年限（期間）	4年
養成すべき人材像	消化器癌の発生・進展に関わる分子生物学的機構について基礎的研究を行い、臨床情報を合わせて解析し研究を展開することで、リサーチマインドを有するがん診療医を養成する。また、がん薬物療法の作用機序や効果、副作用などの特徴を理解し、がん診療チームを牽引できる知識と技術を身につけることを目指す。同時に緩和医療についても学び、患者の痛みやがんサバイバーの悩みを理解できる思いやりのある医師を養成する。
修了要件・履修方法	必修科目24単位、選択科目6単位以上で合計30単位を修得し、研究指導を受けた上で、博士論文の審査および最終試験に合格すること。臨床の経験を通じてがん薬物療法専門医の取得も目指す。
履修科目等	<必修科目>実験実習I, II (各4単位)、研究セミナーI, II (各4単位)、病院診療I (4単位)、グループセミナーI (4単位) <選択科目>病院診療II, III (各2単位)、特別セミナー (4年間で10単位)、研究発表会、研究セミナーの他に横断的腫瘍フォーラム、キャンサーボード、がんプロ主催の患者交流会、合同研修会、市民公開講座、各種セミナーを含む)
がんに関する専門資格との連携	消化器病専門医（日本消化器病学会）の研修施設として認定。内科専門医、肝臓学会専門医、消化器内視鏡学会専門医、がん薬物療法専門医取得のための認定施設である。
教育内容の特色等（新規性・独創性等）	大阪大学関連病院による数多くの臨床研究、高いレベルの内視鏡手術、高難度新規医療技術の導入など学習するとともに、消化器がんを中心としたレベルの高い基礎研究を行う。また、チーム医療実践のために多職種が参加する講義やキャンサーボードに出席し、他の医療職との連携を修得させる。充実した選択科目によって他分野の知識を幅広く身につけさせる。
指導体制	昨今、免疫チェックポイント阻害剤をはじめとする新薬が続々と臨床現場に登場し、これらの薬物治療に精通した医師の養成が重要である。基礎研究とともに本コースでは他科（呼吸器内科、乳腺内分泌外科、消化器外科、血液・腫瘍内科）と連携して、30例の抗がん剤治療を経験することで在学中に専門医試験の受験資格が付与されるがんプロの利点を生かし、がん薬物療法専門医の養成にも力を入れる。 竹原徹郎 大阪大学大学院消化器内科学講座教授 疋田隼人 大阪大学大学院消化器内科学講座講師 林義人 大阪大学大学院消化器内科学講座講師 小玉尚宏 大阪大学大学院消化器内科学講座助教 重川稔 大阪大学大学院消化器内科学講座助教
修了者の進路・キャリアパス	研究コースの目標として医学博士を取得する。がんの内科に関する各種専門医資格（内科専門医、消化器病学会専門医、肝臓学会専門医、消化器内視鏡学会専門医、がん薬物療法専門医など）を取得する。がん診療拠点病院などりサーチマインドをもって未解決の臨床的課題に取り組み、高度な医療を安全に提供できる内科医となるよう教育する。
受入開始時期	令和5年7月
受入目標人数 <small>※当該年度に「新たに」入学する人数を記載。 ※新規に設置したコースに限る。</small>	R5年度 R6年度 R7年度 R8年度 R9年度 R10年度 計 1 1 1 1 1 1 6
受入目標人数設定の考え方・根拠	過去の大学院志願者数及び入学ニーズ調査から毎年度6人程度の志願者が見込まれるため、受け入れ目標人数を1人と設定した。

## 【様式2】

## 教育プログラム・コースの概要

大学名等	大阪大学大学院医学系研究科														
教育プログラム・コース名	医学専攻・脳腫瘍先端研究コース（正規課程）														
対象職種・分野	医師														
修業年限（期間）	4年														
養成すべき人材像	脳腫瘍切除サンプルや血液サンプルなどの生体資料によって得られた分子情報と予後などの臨床情報との関連を調べる。また脳腫瘍切除サンプルを用いた動物モデルの作成やそれを生かした新規治療の開発など臨床サンプルを生かした脳神経外科独自の研究を展開することで、脳腫瘍の新規治療開発を行う先端的な基礎的・臨床的研究を推進する人材を養成する。同時に患者の痛みやがんサバイバーの悩みを理解できる思いやりのある医師を養成する。														
修了要件・履修方法	必修科目24単位、選択科目6単位以上で合計30単位を修得し、研究指導を受けた上で、博士論文の審査および最終試験に合格すること。臨床(補助)の経験を通じて脳神経外科学会専門医の取得も目指す。														
履修科目等	<必修科目>実験実習I, II (各4単位)、グループセミナーI, II (各4単位)、脳腫瘍セミナーI, II (各4単位) <選択科目>論文精読セミナーI, II (各2単位)、病院実習I, II (各1単位)、がんの病態生理学総論（2単位:春夏学期）、がんの病態生理学各論（2単位:秋冬学期）、今、がんは（2単位:秋冬学期）、特別セミナー（4年間で10単位、研究発表会、研究セミナーの他に横断的腫瘍フォーラム、キャンサーボード、がんプロ主催の患者交流会、合同研修会、市民公開講座、各種セミナーを含む）														
がんに関する専門資格との連携	日本脳神経外科学会専門医、がん治療認定医の研修施設として認定。														
教育内容の特色等（新規性・独創性等）	大阪大学関連病院による数多くの臨床研究、高いレベルの手術、高難度新規医療技術の導入など学習とともに、悪性脳腫瘍を中心としたレベルの高い基礎研究を行う。また、チーム医療実践のために多職種が参加する講義やキャンサーボードに出席し、他の医療職との連携を修得させる。充実した選択科目によって他分野の知識を幅広く身につけさせる。														
指導体制	基礎研究ではin vitro 培養系の他に、脳腫瘍患者由來のがん細胞株を樹立してマウス脳に同所移植することによって、薬物や遺伝子の脳腫瘍への効果を評価するシステムを構築した。このような実験系は脳腫瘍の研究領域では大変貴重であり、Cell誌でも高く評価され、脳腫瘍に対する創薬研究を行う上での強みとなる。 貴島晴彦 大阪大学脳神経外科教授 香川尚己 大阪大学脳神経外科講師 沖田典子 大阪大学脳神経外科助教 木嶋教行 大阪大学脳神経外科助教 平山龍一 大阪大学脳神経外科特任助教														
修了者の進路・キャリアパス	研究コースの目標として医学博士を取得する。脳腫瘍および脳腫瘍外科に関する各種専門医資格（脳神経外科専門医、がん治療認定医など）を取得する。がん診療拠点病院などでリサーチマインドをもって未解決の臨床的課題に取り組み、高度な医療を安全に提供できる外科医となるよう教育する。														
受入開始時期	令和5年7月														
受入目標人数 <small>※当該年度に「新たに」入学する人数を記載。 ※新規に設置したコースに限る。</small>	<table border="1"> <thead> <tr> <th>R5年度</th> <th>R6年度</th> <th>R7年度</th> <th>R8年度</th> <th>R9年度</th> <th>R10年度</th> <th>計</th> </tr> </thead> <tbody> <tr> <td>1</td> <td>1</td> <td>1</td> <td>1</td> <td>1</td> <td>1</td> <td>6</td> </tr> </tbody> </table>	R5年度	R6年度	R7年度	R8年度	R9年度	R10年度	計	1	1	1	1	1	1	6
R5年度	R6年度	R7年度	R8年度	R9年度	R10年度	計									
1	1	1	1	1	1	6									
受入目標人数設定の考え方・根拠	過去の大学院志願者数及び入学ニーズ調査から毎年度4~5人程度の志願者が見込まれるため、そのうち少なくとも一人は基礎研究をしっかりと行うこととして受け入れ目標人数を1人と設定。														

【様式 2】

大学名等	大阪大学大学院医学系研究科														
教育プログラム・コース名	医学専攻・免疫治療世代がん薬物治療専門医養成コース（正規課程）														
対象職種・分野	医師														
修業年限（期間）	4年														
養成すべき人材像	臓器横断的な薬物療法の基礎、臨床を習得し、専門とする臓器のがんの先進的診断、治療を行う。他の専門分野の医療職と連携しチーム医療を実践し、統合的ながん診療体系を構築する。殊に近年の喫緊の課題である、免疫チェックポイントの研究に注力し、新たながん薬物治療に対応できる臨床医を養成する。														
修了要件・履修方法	各専攻科での副プログラムのうち、必修科目6単位と本コースの実習としてがん薬物治療実習を2単位、選択科目10単位以上で合計18単位を修得、論文指導を受けた上で、博士論文の審査および最終試験の合格、および臨床腫瘍学会の癌薬物療法専門医試験に合格すること。														
履修科目等	<必修科目>がん薬物治療実習（2単位）、各専攻科で設定している副プログラムのうち必修科目を6単位 <選択科目>特別セミナー（4年間で10単位、研究発表会、研究セミナーの他に横断的腫瘍フォーラム、キャンサーサポート、がんプロ主催の患者交流会、合同研修会、市民公開講座、各種セミナーを含む）														
がんに関する専門資格との連携	がん薬物療法専門医（日本臨床腫瘍学会）の研修施設として認定。														
教育内容の特色等（新規性・独創性等）	大阪大学は臨床研究中核病院でもあり、新規薬剤の早期開発、医師主導治験に実際に携わる事が可能である。総合大学であるが故に、幅広いトランスレーショナル研究が可能であり、がんの研究、診療の最先端に携わりながら、学位習得、専門医習得が可能である事が特色である。また、チーム医療実践のために多職種が参加する講義やキャンサーサポートに出席し、他の医療職との連携を修得させる。全国e-ラーニングを積極的に取り入れて、他分野の知識を幅広く身につけさせれる。														
指導体制	外来化学療法を担うオンコロジーセンターを中心に診療を担当し、血液腫瘍内科、消化器内科、消化器外科、呼吸器内科、乳腺外科、婦人科、整形外科の薬物療法を専門とする医師が指導する。 水木満佐央（血液内科准教授）が全体の統括を行い、各科の教授のもと指導教官が派遣され、外来での診療と教育を担当する。消化器がん治療では佐藤太郎病院教授も教育を担当する。														
修了者の進路・キャリアパス	がん薬物療法専門医を基盤としてがん診療に携わるスタッフの育成を行い、CAR-T療法や免疫チェックポイント阻害剤などの新規がん薬物療法に関する研究、診療をリードする医師になることが期待される。														
受入開始時期	令和5年7月														
受入目標人数 ※当該年度に「新たに」入学する人数を記載。 ※新規に設置したコースに限る。	<table border="1"> <thead> <tr> <th>R5年度</th> <th>R6年度</th> <th>R7年度</th> <th>R8年度</th> <th>R9年度</th> <th>R10年度</th> <th>計</th> </tr> </thead> <tbody> <tr> <td>1</td> <td>1</td> <td>1</td> <td>1</td> <td>1</td> <td>1</td> <td>6</td> </tr> </tbody> </table>	R5年度	R6年度	R7年度	R8年度	R9年度	R10年度	計	1	1	1	1	1	1	6
R5年度	R6年度	R7年度	R8年度	R9年度	R10年度	計									
1	1	1	1	1	1	6									
受入目標人数設定の考え方・根拠	過去の実績と現場のマンパワーを考慮して、受け入れ目標人数を毎年1人と設定。														

【様式 2】

大学名等	大阪大学大学院医学系研究科
教育プログラム・コース名	保健学専攻（博士前期課程）・がん治療を目指した分子ゲノムコース（正規課程）
対象職種・分野	臨床検査技師
修業年限（期間）	2年
養成すべき人材像	分子標的治療、個別化医療などの新たながん治療法の開発には、がんの発生・進展のメカニズムやエピジェネティクス、ゲノム情報の取り扱いやその情報を基にした治療法の選択など様々な知識の習得が必要となる。本コースでは、がんに関する基本的知識、最先端の知見を得ながら、主にマイクロRNAやsiRNAによる核酸治療の開発を中心とした創薬研究を行い、医療人又は研究者として、これから創薬研究を担うエキスパートを育成する。
修了要件・履修方法	必須科目 22 単位、選択必修科目 1 単位以上、選択科目、合計 30 単位以上を取得し、核酸治療をはじめとする新たながん治療法の開発研究を行い、論文指導を受けた上で、本大学院が行う修士論文の審査に合格すること。
履修科目等	(必須科目) 分子ゲノムセミナーI, II (各 2 単位) 分子ゲノム実習I, II (各 4 単位)、がんの病態生理学各論 (2 単位)、医療技術科学ゼミナールI, II (各 4 単位) (選択必修科目) 先進がん薬物療法副作用学特論 (1 単位) 先進緩和医療薬物学特論 (1 単位) ゲノム医薬品学特論 (1 単位) (選択科目) がんの病態生理学 (2 単位)、分子腫瘍医学特論 (2 単位)他
がんに関する専門資格との連携	なし
教育内容の特色等（新規性・独創性等）	核酸医薬は神経・筋変性疾患を中心に一定の臨床効果をもたらしてきたが、がんに対する核酸治療はハードルが高く未だ成功していない。教室では、担当講座ではこれまでにもマルチオミクスを駆使して、がんに対する治療効果を示す核酸を数多く、発見・開発してきた実績がある。更に独自に開発した Drug Delivery System (DDS) によってマウス、ラット、サルを用いた前臨床試験を進めてきた。本コースでは、核酸医薬によるがん治療に関する最先端の創薬研究を行わせることで、この分野の発展に寄与する人材の育成を行う。
指導体制	教授1名、助教1名が主に講義・実習を担当する。核酸医薬設計の世界的権威である名取幸和招聘教授と共に核酸の設計から、がん細胞を用いた薬剤のスクリーニング、マウスを使った安全性と治療効果の評価まで、最先端のがん治療剤の開発過程を習得できることが本コースの強みとなる。  山本浩文 大阪大学大学院分子病理学教授 名取幸和 大阪大学大学院分子病理学招聘教授 横山雄起 大阪大学大学院分子病理学助教（学内講師）
修了者の進路・キャリアパス	がん研究のエキスパートとして大学、研究所、企業で新たながん治療法の研究開発に携わり、これから創薬研究を担う人材として活躍できる。
受入開始時期	令和5年7月
受入目標人数 ※当該年度に「新たに」入学する人数を記載。 ※新規に設置したコースに限る。	R5年度 R6年度 R7年度 R8年度 R9年度 R10年度 計 1 1 1 1 1 1 6
受入目標人数設定の考え方・根拠	過去の大学院志願者数及び入学ニーズ調査から毎年度1名の志願者が見込まれるために、受入れ目標人数を1人と設定し、今後6年間で6名以上のエキスパート育成を目指す。

【様式 2】

大学名等	大阪大学大学院薬学研究科
教育プログラム・コース名	創成薬学専攻（前期課程・後期課程）・医療薬学専攻・ゲノム創薬研究薬学コース（正規課程）
対象職種・分野	薬学研究科大学院生
修業年限（期間）	・創成薬学専攻（前期課程）：2年　・創成薬学専攻（後期課程）：3年　・医療薬学専攻：4年
養成すべき人材像	患者個々のゲノム特性に基づき、最適のがん薬物治療を行うことを目指して、最先端のゲノム創薬研究を行う薬学研究者を養成する。
修了要件・履修方法	・創成薬学専攻（前期課程）：選択基礎科目のうち、演習科目3単位、選択専門科目から4単位を修得すること。 ・創成薬学専攻（後期課程）：選択必須科目より、がん基礎研究特別演習6単位を修得すること ・医療薬学専攻：選択必須基礎科目のうち、指定の科目から4単位以上、がん臨床研究特別演習7単位を修得すること。
履修科目等	〈選択必修科目〉 がん緩和医療特別演習3単位 がん基礎研究特別演習6～7単位 がん臨床研究特別演習6～7単位 〈選択必修科目〉（各1単位） 新規がん治療特論 現代がん特論 ゲノム医薬学特論 ゲノム医療体内動態解析学特論 ゲノム医療評価統計学特論 先進がん薬物療法副作用学特論 先進緩和医療薬物学特論
がんに関する専門資格との連携	講義など指導について連携する大阪大学医学部附属病院は、日本医療薬学会がん専門薬剤師認定制度の認定研修施設である。
教育内容の特色等（新規性・独創性等）	医学部附属病院、医学部等と連携して、実臨床における患者個々のゲノム特性に基づいて、高度な最先端ゲノム創薬研究を実施できる環境が整っている。第4期はCAR-T療法などの新しい免疫療法を中心としたがん治療について教育する新規がん治療特論を開講し、免疫療法に精通した薬剤師を養成する。また、がん患者を取り巻く心理的・社会的問題や、多職種による緩和医療の現状から、アルファ線などの新規放射線治療に至るまで現在のがんを取り巻く諸問題や治療モダリティーについて広くがんについての知識を高めるためのインテンシブコースとして現在がん特論を新たに開講する。オンラインによる受講環境やeラーニングコンテンツも整備し、受講者のニーズに合わせて柔軟な教育を行う。
指導体制	外部講師を招聘し、最先端のゲノム創薬研究教育講演を行う。 コース生に対する研究支援は、本学教授1名、助教1名が主に指導する。
修了者の進路・キャリアパス	ゲノム創薬研究者あるいは高い専門性を持った薬剤師としてアカデミアもしくは大学病院、地域拠点病院などで中心的な働きをする。
受入開始時期	令和5年7月
受入目標人数 <small>※当該年度に「新たに」入学する人数を記載。 ※新規に設置したコースに限る。</small>	R5年度 R6年度 R7年度 R8年度 R9年度 R10年度 計 1 1 0 0 0 0 2
受入目標人数設定の考え方・根拠	過去の大学院志願者数及び入学ニーズ調査から毎年度0-1人の志願者が見込まれるため、受入れ目標人数を1人と設定。コース開設者がR6で退職の予定であり、次期着任者の意向にもよるため、R7年度以降は一旦0とした。

## 【様式2】

## 教育プログラム・コースの概要

大学名等	京都府立医科大学大学院医学研究科
教育プログラム・コース名	統合医科学専攻・専門のがん疼痛治療の実践と緩和ケア体制構築の要となる緩和ケア専門医育成コース（正規課程）
対象職種・分野	医師
修業年限（期間）	4年
養成すべき人材像	がん患者における疼痛の病態生理を理解し、機序に基づいた治療を実践することができる。神経ブロックの適応と実施方法を理解、手技を習得し実践することができる。痛み以外の身体的苦痛、精神的苦痛などトータルペインの診断を理解し、緩和ケアチームのリーダーとしてその対処にあたることができる。アドバンス・ケア・プランニングを実践し、あわせて患者中心のがん診療に貢献することができる。
修了要件・履修方法	必修科目20単位、選択科目10単位以上、合計30単位以上を修得し、かつ、必要な研究指導を受けた上で、本大学院が行う博士論文の審査及び最終試験に合格すること。
履修科目等	<必修科目> 分子標的予防医学(2単位)、人体病理学(2単位)、病態分子薬理学(2単位)、集学放射線診断治療学(2単位)、包括的緩和医療学(2単位)、血液内科学(2単位)、特別研究(8単位) <選択科目> 小児科学(2単位)、ゲノム医科学(2単位)、分子生化学(2単位)、分子病態感染制御・検査医学(2単位)、免疫内科学(2単位)、女性生涯医科学(2単位)、呼吸器内科学(2単位)、皮膚科学(2単位)、消化器内科学(2単位)、消化器外科学(2単位)、内分泌・乳腺外科学(2単位)、呼吸器外科学(2単位)、脳神経機能再生外科学(2単位)、運動器機能再生外科学(2単位)、耳鼻咽喉科・頭頸部外科学(2単位)、泌尿器外科学(2単位)、生物統計学(2単位)、腫瘍循環器学(2単位)、腫瘍腎臓学(2単位)、がんゲノム検査入門(2単位)
がんに関する専門資格との連携	緩和医療専門医（日本緩和医療学会）、ペインクリニック専門医（日本ペインクリニック学会）の研修施設として認定。
教育内容の特色等（新規性・独創性等）	本コースを指導する疼痛・緩和医療学教室は緩和ケアとペインクリニックを一体として実践するために設置されており、緩和医療専門医やペインクリニック専門医がスタッフとして在籍している。専門医資格保持者によるオン・ザ・ジョブ・トレーニングにより、効率的な学修が可能となる。また、本学附属病院は京都府がん診療連携拠点病院であるとともに、緩和ケアセンター、緩和ケア病棟が設置され、豊富な症例に恵まれている。緩和ケアチームの一員として活動することで、チーム医療としてのがん診療のチーム医療を学ぶことができる。定期的なカンファレンスにより受講生が実施した診療に対するフィードバック・ピアレビューを行うことができる。
指導体制	がん疼痛は基より、あらゆる痛みのケアに対応できるペインクリニック専門医、また緩和ケアチーム、緩和病棟での看取り、在宅緩和医療の経験もある緩和医療専門医が多く在籍する疼痛・緩和医療学教室の教員が指導する。
修了者の進路・キャリアパス	緩和医療専門医とペインクリニック専門医の取得を目指し、がん拠点病院での診療に従事する



## 【様式 2】

## 教育プログラム・コースの概要

大学名等	京都府立医科大学大学院保健看護学研究科
教育プログラム・コース名	保健看護学専攻（博士前期課程）・高度実践がん看護専門看護師コース （ペインマネジメントに強いがん看護専門看護師コース）（正規課程）
対象職種・分野	看護師
修業年限（期間）	2年
養成すべき人材像	がん患者の全人的な苦痛を理解し、患者やその家族に対してQOLの視点に立った水準の高い看護を提供する人材を育成する。特に、疼痛緩和、終末期医療の分野に強みを持つ人材育成に取り組み、患者中心のケアの実践、他職種・地域医療との連携を先駆的に行える人材を育成する。また、組織的な課題の解決を図り、医療チームの一員として、がん患者と家族を取り巻く医療システム内を調整し、がん医療・看護の質向上に貢献できる人材の育成を目指す。
修了要件・履修方法	がん看護分野の高度実践看護師教育課程（専門看護師38単位）に応じた必要単位および本学大学院必修科目を修得し、必要な研究指導を受けた上で、特定の課題についての研究成果の審査および試験に合格すること。
履修科目等	<p>&lt;必修科目&gt;</p> <p>保健看護学理論（2単位）、研究方法論特論（2単位）、ヘルスアセスメント特論（2単位）、病態生理学総論（2単位）、腫瘍病態生理学各論（2単位）、臨床薬理作用論（2単位）、がん看護学特論（2単位）、がん看護学援助特論（2単位）、緩和ケア（2単位）、<u>&lt;新&gt;ペインマネジメント（1単位）</u>、<u>&lt;新&gt;エンド・オブ・ライフケア（1単位）</u>、がん薬物療法看護（2単位）、がん看護学演習Ⅰ（2単位）、がん看護学演習Ⅱ（2単位）、がん看護学実習Ⅰ～Ⅲ（各2単位）、がん治療看護実習Ⅰ（2単位）、<u>がん治療看護実習Ⅱ（2単位）</u>、英書講読（2単位）、がん看護学課題研究（2単位）</p> <p>&lt;選択科目&gt;</p> <p>臨床遺伝学特論（2単位）、小児看護特論（2単位）、発達障害特論（2単位）、女性保健看護学特論（2単位）、高齢者保健看護特論（2単位）。高齢者ケア特論（2単位）、成人健康回復期支援特論Ⅰ・Ⅱ（各2単位）、看護教育学特論（2単位）、コンサルテーション論（2単位）、看護倫理（2単位）、看護管理（2単位）、看護政策論（1単位）、保健看護情報科学特論（2単位）ほか。</p>
がんに関する専門資格との連携	高度実践看護師教育課程として日本看護系大学協議会に教育課程の審査を受け、38単位教育課程として認可を受けている。

教育内容の特色等 (新規性・独創性等)	<p>本コースは、日本看護系大学協議会の認定を受けた高度実践看護師教育課程(がん看護専門看護師38単位教育課程)のプログラムである。ケアとキュアを統合した高度ながん看護実践に必要な専門的な臨床判断、様々な治療を受ける患者の治療過程に伴う看護実践、在宅医療を推進するための地域連携への支援ができる能力を育成する。この教育課程を基盤とし、今回、集学的な痛みの治療・ケアなどがん患者のQOL向上、終末期医療を担う人材育成を強化するための見直しを図り、難治性の疼痛を含むペインマネジメント、エンド・オブ・ライフケア実践能力を強化するための教育内容を選択できるカリキュラム構成とした。</p> <p>本学附属病院は、都道府県がん診療連携拠点病院の機能を有し、先進的ながん治療、および、緩和医療が推進されている。疼痛緩和においては、疼痛・緩和医療学講座を中心に、がんやその治療によるさまざまな苦痛、特に、難治性の疼痛に対する高度な神経ブロック治療が実践されている。今回新設した科目である「ペインマネジメント」においては、がん性疼痛の基本的知識から難治性疼痛の病態、最新の治療を学修する。本科目の新設に伴い、「がん看護学演習Ⅰ」および「がん治療看護実習Ⅱ」を大幅に見直し、演習や実習においては、難治性の疼痛を体験する患者の看護を展開し、実践的能力を身につけることが可能である。</p> <p>終末期医療においては、「エンド・オブ・ライフケア」を新設科目として設定した。これまで既存の「緩和ケア」において終末期の内容に触れていたが、本科目においてはエンド・オブ・ライフ期に特化し、自己概念、死のアウェアネス理論などの理論にも触れながら、アドバンス・ケア・プランニングを推進し、患者と家族の人生を支えるための対話的態度を有する高度実践家の養成を目指す。これらの学修を重ねた上で、従来より採り入れていた緩和ケア病棟における事例展開、在宅ホスピスにおける実習を体験することにより、確実な高度実践力、職種間連携力が身につくことが期待される。</p>														
指導体制	がん性疼痛看護認定看護師の資格を持つ教員、緩和ケア、エンド・オブ・ライフケアを研究領域とする教員が指導に当たる。また、演習、実習指導においては、がん看護専門看護師、緩和ケア認定看護師、疼痛・緩和医療科の医師、薬剤師等からも直接指導を受けられる体制にある。また、医学科の関連講義、公開講座にも参加できる環境にあり、緩和ケアキャンサーサポートなどへの参画も計画しており、多面的な学修が可能である。														
修了者の進路・キャリアパス	大学院保健看護学研究科修了後に認定審査に合格の上、がん看護専門看護師として認定される。本プログラムを修了することにより、がん看護専門看護師としての活動(実践、コンサルテーション、調整、倫理調整、教育、研究)において、特にペインマネジメント、エンド・オブ・ライフケアの実践能力を強みとしながら、がん患者と家族の支援を行い、調整する人材として、病院施設だけでなく在宅医療の場で活躍することが期待される。														
受入開始時期	令和6年4月														
受入目標人数 <small>※当該年度に「新たに」入学する人数を記載。 ※新規に設置したコースに限る。</small>	<table border="1" data-bbox="409 1379 1304 1500"> <thead> <tr> <th>R5年度</th><th>R6年度</th><th>R7年度</th><th>R8年度</th><th>R9年度</th><th>R10年度</th><th>計</th></tr> </thead> <tbody> <tr> <td>-</td><td>2</td><td>2</td><td>2</td><td>2</td><td>2</td><td>10</td></tr> </tbody> </table>	R5年度	R6年度	R7年度	R8年度	R9年度	R10年度	計	-	2	2	2	2	2	10
R5年度	R6年度	R7年度	R8年度	R9年度	R10年度	計									
-	2	2	2	2	2	10									
受入目標人数設定の考え方・根拠	京都府地域がん診療病院2か所、および、地域がん診療連携拠点病院でがん看護専門看護師数が充足していない施設への配置を目指し、5年で10名排出する。														

## 【様式2】

## 教育プログラム・コースの概要

大学名等	京都府立医科大学大学院医学研究科
教育プログラム・コース名	統合医科学専攻・陽子線を含む放射線治療専門医育成コース（正規課程）
対象職種・分野	医師
修業年限（期間）	4年
養成すべき人材像	質の高い集学的専門医療を提供するために、放射線治療全般の知識を有し、実践的な能力を持つ緩和的放射線治療の専門家を育成する。看護師や薬剤師などのチーム医療や国際的にも活躍しうる医師を育成する。
修了要件・履修方法	必修科目20単位、選択科目10単位以上、合計30単位以上を修得し、かつ、必要な研究指導を受けた上で、本大学院が行う博士論文の審査及び最終試験に合格すること。
履修科目等	<p>&lt;必修科目&gt;</p> <p>分子標的の予防医学(2単位)、人体病理学(2単位)、病態分子薬理学(2単位)、集学放射線診断治療学(2単位)、包括的緩和医療学(2単位)、血液内科学(2単位)、特別研究(8単位)</p> <p>&lt;選択科目&gt;</p> <p>小児科学(2単位)、ゲノム医科学(2単位)、分子生化学(2単位)、分子病態感染制御・検査医学(2単位)、免疫内科学(2単位)、女性生涯医科学(2単位)、呼吸器内科学(2単位)、皮膚科学(2単位)、消化器内科学(2単位)、消化器外科学(2単位)、内分泌・乳腺外科学(2単位)、呼吸器外科学(2単位)、脳神経機能再生外科学(2単位)、運動器機能再生外科学(2単位)、耳鼻咽喉科・頭頸部外科学(2単位)、泌尿器外科学(2単位)、生物統計学(2単位)、腫瘍循環器学(2単位)、腫瘍腎臓学(2単位)、がんゲノム検査入門(2単位)</p>
がんに関する専門資格との連携	放射線治療専門医（日本医学放射線学会）の研修施設として認定。
教育内容の特色等 (新規性・独創性等)	緩和的放射線治療の専門家育成のために、全科的な実践的系統講義を行う。実習においては全科のがん種に対応できるように放射線治療やインターベンショナルラジオロジーを学び、特に医学物理の知識や特殊放射線治療でIMRTや小線源治療、がん性疼痛に対する放射線治療の研修を行う。当院の特色として、陽子線治療施設の導入があげられる。小児がん拠点病院であると同時に同一敷地内に陽子線治療施設を持つ施設は数少なく、小児がんを実践的に学ぶ場の提供が可能である。また画像誘導小線源治療を用いた緩和放射線治療も外来で低侵襲に1-2回で施行可能である。多職種教育推進のために、講義を看護師・技師・薬剤師などが共有できる形で行い、学生自らが参加する多職種キャンサーサポートや医療従事者対象の研修会を定期的に開催しチーム医療を学べる場として積極的に取り組む。
指導体制	放射線治療指導医、緩和ケア指導医、医学物理士、癌治療認定機構指導医等が直接学生の指導に当たる。基礎、臨床、生物統計等の専門家による全科的実践的系統講義を行う。多職種チーム医療を学ぶために、キャンサーサポートや研究会を通じて多職種合同での指導体制を取る。
修了者の進路・キャリアパス	放射線科治療専門医・がん治療認定医等を取得し、緩和的放射線治療の専門家（放射線治療医）としての対応が可能となる。基礎的病態から実地医療の現状、生物統計学を習得することにより、将来新規治療開発を担う人材の育成が可能となる。



## 【様式2】

## 教育プログラム・コースの概要

大学名等	京都府立医科大学大学院医学研究科
教育プログラム・コース名	統合医科学専攻・小児新規免疫療法開発者育成コース（正規課程）
対象職種・分野	医師
修業年限（期間）	4年
養成すべき人材像	小児・AYA世代のがん患者に質の高い専門医療を提供するために、小児・AYA世代のがんの多彩な病態を理解し、集学的治療に対応でき、特にCAR-T療法や腫瘍溶解性ウイルス療法といった、新規の免疫療法の開発に貢献できる人材の育成を目指す。
修了要件・履修方法	必修科目20単位、選択科目10単位以上、合計30単位以上を修得し、かつ、必要な研究指導を受けた上で、本大学院が行う博士論文の審査及び最終試験に合格すること。
履修科目等	<p>&lt;必修科目&gt;</p> <p><u>分子標的予防医学(2単位)</u>、<u>人体病理学(2単位)</u>、<u>病態分子薬理学(2単位)</u>、<u>集学放射線診断治療学(2単位)</u>、<u>包括的緩和医療学(2単位)</u>、<u>血液内科学(2単位)</u>、<u>特別研究(8単位)</u></p> <p>&lt;選択科目&gt;</p> <p><u>小児科学(2単位)</u>、<u>ゲノム医科学(2単位)</u>、<u>分子生化学(2単位)</u>、<u>分子病態感染制御・検査医学(2単位)</u>、<u>免疫内科学(2単位)</u>、<u>女性生涯医科学(2単位)</u>、<u>呼吸器内科学(2単位)</u>、<u>皮膚科学(2単位)</u>、<u>消化器内科学(2単位)</u>、<u>消化器外科学(2単位)</u>、<u>内分泌・乳腺外科学(2単位)</u>、<u>呼吸器外科学(2単位)</u>、<u>脳神経機能再生外科学(2単位)</u>、<u>運動器機能再生外科学(2単位)</u>、<u>耳鼻咽喉科・頭頸部外科学(2単位)</u>、<u>泌尿器外科学(2単位)</u>、<u>生物統計学(2単位)</u>、<u>腫瘍循環器学(2単位)</u>、<u>腫瘍腎臓学(2単位)</u>、<u>がんゲノム検査入門(2単位)</u></p>
がんに関する専門資格との連携	小児血液・がん学会専門医（小児血液・がん学会）、がん治療認定医（がん治療認定）、血液専門医（日本血液学会）の研修施設として認定。
教育内容の特色等（新規性・独創性等）	小児がんは、稀少ではあるゆえにこそ、広く認知をされ、適切な初期診断と治療導入を行われるべきである。その多彩な病態を理解し、適切に対応できる人材を育成するため、病態・診断・治療、生物統計学等の全科的実践的系統講義を行い、病態解明の基礎的研究または治療成績向上を目指す臨床研究への関与を必須とする。また、国際的な場でも活躍できるよう外国人講師を招いての講義も行う。全国でも有数の小児がん拠点病院である本学附属病院の特徴を活かし、小児がん患者に対する全人的医療の実践的指導を行う。全身のあらゆる臓器・組織から発生し得る小児がんの臨床実習では、各診療科のがん専門医の指導を受ける。小児がんにおいては、長期的予後の改善のみならず、放射線治療合併症（成長・内分泌障害）や妊娠能喪失などの長期的合併症の軽減が求められている。陽子線治療センターや生殖医療センターをフル活用し、他施設では経験できない、より高度で実践的な学び場を提供する。また、学生自らが参加する多職種キャンサーボードや医療従事者対象の研修会を定期的に開催し、多職種によるチーム医療の概念と実際を学ぶ。さらに小児B細胞性急性リンパ性白血病の再発に対するCAR-T療法の実際（適応、アフェレーシス、輸注、副作用、輸注後のフォローアップ）について、症例を通じて実態を学ぶ。研究関連としては、新規CAR-T細胞の設計・作製、培養法、フローサイトメトリーによる殺細胞効果の評価法の理解を深める。腫瘍溶解性ウイルスについては、治療標的の選定、プロモーターによる制御メカニズムの理解、新規ウイルス作製、接着能・増殖能・殺傷能の評価法を学ぶ。これらのテーマを修得できるのは本学のみであり、極めて独創的と言える。

指導体制	小児血液・がん指導医、血液指導医、癌治療認定機構指導医、造血・細胞療法認定医、および留学中に免疫療法の開発に携わった研究者が直接学生の指導に当たる。小児がんに関わる、基礎、臨床、生物統計等の専門家による全科的実践的系統講義を行う。多職種チーム医療を学ぶために、キャンサーボードや研究会を通じて多職種合同での指導体制を取る。また研究に関連し、リサーチカンファレンスや基礎研究に関する論文の抄読会に参加し、分子生物学的・免疫学的手法や、批判的に論文を吟味する方法を習得する。														
修了者の進路・キャリアパス	小児血液・がん専門医、血液専門医、がん治療認定医、造血・細胞療法認定医、がん薬物療法医等を取得し、小児がんの集学的治療への対応が可能となる。小児がんは多彩な病態を示し、治療成績の改善が望まれる分野で有るが、本プログラムを修了することで、基礎的病態からCAR-T輸注を含む実地医療の現状、生物統計学を習得できる。さらにCAR-Tや腫瘍溶解性ウイルス療法のデザインから、作製、治療効果の評価に至るまで新規免疫療法の開発を担う人材の育成が可能となる。														
受入開始時期	令和5年7月														
受入目標人数 <small>※該年度に「新たに」入学する人数を記載。 ※新規に設置したコースに限る。</small>	<table border="1"> <thead> <tr> <th>R5年度</th><th>R6年度</th><th>R7年度</th><th>R8年度</th><th>R9年度</th><th>R10年度</th><th>計</th></tr> </thead> <tbody> <tr> <td>1</td><td>1</td><td>1</td><td>1</td><td>1</td><td>1</td><td>6</td></tr> </tbody> </table>	R5年度	R6年度	R7年度	R8年度	R9年度	R10年度	計	1	1	1	1	1	1	6
R5年度	R6年度	R7年度	R8年度	R9年度	R10年度	計									
1	1	1	1	1	1	6									
受入目標人数設定の考え方・根拠	都道府県内の2つの小児がん拠点病院と5つの小児がん連携病院に小児血液がん専門医を最低3人ずつ配置することを目標にすると、都道府県内の小児血液がん専門医数が17人のため今後5年間で5人養成する。また、過去の大学院志願者数及び入学ニーズ調査から毎年度1人の志願者が見込まれるため、受け入れ目標人数を6人と設定。														

## 【様式2】

## 教育プログラム・コースの概要

大学名等	京都府立医科大学大学院医学研究科
教育プログラム・コース名	統合医科学専攻・腫瘍内科先端研究者育成コース（正規課程）
対象職種・分野	医師
修業年限（期間）	4年
養成すべき人材像	成人および高齢者のがん患者を対象とし、各臓器のがんに対して集学的治療を含めた専門的な医療を提供できる腫瘍内科専門医を育成する。さらに、新たな発がんメカニズムの解明や新薬開発につながる先端的な研究にも関わる人材育成を目指す。
修了要件・履修方法	必修科目20単位、選択科目10単位以上、合計30単位以上を修得し、かつ、必要な研究指導を受けた上で、本大学院が行う博士論文の審査及び最終試験に合格すること。
履修科目等	<p>&lt;必修科目&gt;</p> <p><u>分子標的予防医学(2単位)</u>、<u>人体病理学(2単位)</u>、<u>病態分子薬理学(2単位)</u>、<u>集学放射線診断治療学(2単位)</u>、<u>包括的緩和医療学(2単位)</u>、<u>血液内科学(2単位)</u>、<u>特別研究(8単位)</u></p> <p>&lt;選択科目&gt;</p> <p><u>小児科学(2単位)</u>、<u>ゲノム医科学(2単位)</u>、<u>分子生化学(2単位)</u>、<u>分子病態感染制御・検査医学(2単位)</u>、<u>免疫内科学(2単位)</u>、<u>女性生涯医科学(2単位)</u>、<u>呼吸器内科学(2単位)</u>、<u>皮膚科学(2単位)</u>、<u>消化器内科学(2単位)</u>、<u>消化器外科学(2単位)</u>、<u>内分泌・乳腺外科学(2単位)</u>、<u>呼吸器外科学(2単位)</u>、<u>脳神経機能再生外科学(2単位)</u>、<u>運動器機能再生外科学(2単位)</u>、<u>耳鼻咽喉科・頭頸部外科学(2単位)</u>、<u>泌尿器外科学(2単位)</u>、<u>生物統計学(2単位)</u>、<u>腫瘍循環器学(2単位)</u>、<u>腫瘍腎臓学(2単位)</u>、<u>がんゲノム検査入門(2単位)</u></p>
がんに関する専門資格との連携	がん薬物療法専門医、腫瘍内科専門医（日本臨床腫瘍学会）、がん治療認定医（がん治療認定医機構）の研修施設として認定。

教育内容の特色等 (新規性・独創性等)	<p>悪性腫瘍は本邦における死者数第一位の疾患であり、その多くが成人および高齢者であることから、今後社会の高齢化に伴って専門職の育成はますます重要となる。特に薬物療法については従来の進行がんのみならず、早期がんにおける周術期薬物療法や局所進行期がんに対する放射線と薬物療法の併用など、集学的治療の拡がりとともに、薬物治療に精通した専門医の育成は喫緊の課題である。そこで、本コースでは各臓器がんの標準治療とその課題について各臓器の専門医による系統的、網羅的な講義ならびに単位認定が行われる。また、がん研究に共通する重要な項目として臨床統計学、病理学、検査医学、ゲノム医科学、がん予防医学の実際にについても講義を行う。</p> <p>また、実際に複数領域のがん患者を実際に担当して診断、治療に習熟する。さらに各診療科から提案される治療プロトコルの審査にも関わることで、各臓器がんの新規治療の情報を更新する。</p> <p>近年拡がりをみせているゲノム医療については、検出された新たな遺伝子異常にについてがんゲノム医療センターにおける事前検討会およびエキスパートパネル会議に参加して遺伝子パネル検査の実際とその意義について理解する。</p> <p>実臨床上の問題点については各臓器毎に多職種が参加して行われるキャンサーボード、臓器横断的な問題、倫理的な問題については医療者カンファレンスに参加して討議する機会を得る。</p> <p>研究については、臨床研究では各臓器毎に実施される臨床試験や新薬治験に参加して研究手法に習熟する。基礎研究についても新薬開発の実績がある本学創薬センターでの研究が可能である。</p> <p>教育の場として対面で講義の聴講やカンファレンスでの臨床討議は重要ではあるものの若手医師が自由に発言できる機会は多くない。そこで、本コースではメタバース空間にカンファレンスルームを準備し、教員と学生がアバターを利用して自由に発表や討議できるサイエンスカフェの定期開催を予定している。</p>														
指導体制	<p>講義については前項の内容でそれぞれ単位認定が行われる。臨床実習に関しては各臓器の専門医に加えてがん薬物療法専門医・指導医、がん治療認定医が指導し、がん薬物療法センタースタッフが支援する。がんゲノム医療についてはがんゲノム医療センタースタッフが指導する。</p>														
修了者の進路・キャリアパス	<p>本コースで腫瘍内科専門医、がん薬物療法専門医、がん治療認定医を取得した後は、本学の教員としてがん薬物療法の教育や附属病院でがん薬物療法に従事する。また、京都府内のがん拠点病院で常勤医としてがん薬物療法に従事する。</p>														
受入開始時期	令和5年7月														
受入目標人数 <small>※当該年度に「新たに」入学する人数を記載。 ※新規に設置したコースに限る。</small>	<table border="1" data-bbox="409 1320 1304 1448"> <thead> <tr> <th>R5年度</th><th>R6年度</th><th>R7年度</th><th>R8年度</th><th>R9年度</th><th>R10年度</th><th>計</th></tr> </thead> <tbody> <tr> <td>6</td><td>6</td><td>6</td><td>6</td><td>6</td><td>6</td><td>36</td></tr> </tbody> </table>	R5年度	R6年度	R7年度	R8年度	R9年度	R10年度	計	6	6	6	6	6	6	36
R5年度	R6年度	R7年度	R8年度	R9年度	R10年度	計									
6	6	6	6	6	6	36									
受入目標人数設定の考え方・根拠	<p>京都府内の9つの地域がん診療連携拠点病院および2つの地域がん診療病院にそれぞれ、腫瘍内科専門医を4人ないし2人ずつ配置することを目標にすると、京都内のがん薬物療法専門医数が47人でその半数が大学病院に在籍していることから、今後5年間で最低20人の養成が必要。また、過去の大学院志願者数及び入学ニーズ調査から毎年度4~8人の志願者が見込まれるため、受入れ目標人数を6人と設定。</p>														